

各国の言語の一人称の数とその国々のキリスト教徒の割合には相関がある

越川晴貴 23B20690
東京工業大学物質理工学院

1. はじめに

Research Question: 各国が公用語もしくは国語として使用する言語の一人称の数と、その国々の人口に対するキリスト教徒の割合は負の相関があるか。

やること: キリスト教徒の割合と一人称名詞の数に相関性があるかわからないので主要な言語についての一人称名詞の数を調べ、それらの言語を公用語としている国の人口に対するキリスト教徒の割合を調べたのちに、相関があるかを確かめる。そこからなぜそのような相関があるのかを考える。

2. 方法

英語(ここでは多民族国家であるアメリカを代表として調べる)、中国語、韓国語、日本語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、ギリシャ語、ロシア語、ベトナム語の一人称名詞の数について調べる。ただし、国教を定めている国は除く(国教とは国が保護している宗教なので必然的に信者が増えてしまうからである)としたのでアラビア語などは除く。またそれらを公用語として用いている国々(アメリカ、中国、韓国、スペイン、ドイツ、フランス、イタリア、ポルトガル、ギリシャ、ロシア、ベトナムの人口に対するキリスト教徒(ここではカトリックとプロテスタントは区別しない)の割合を調べる。そこから相関を見出し、考察する。

3. 結果

表1: 各国の言語に対する一人称名詞の数とキリスト教徒の割合

言語	一人称名詞の数	キリスト教徒の割合
日本語 (日本)	約20	1%
ベトナム語(ベトナム)	約10	9%
中国語 (中国)	3	10%
韓国語 (韓国)	2	30%
ロシア語 (ロシア)	1	47%
ドイツ語 (ドイツ)	1	52%
英語 (アメリカ)	1	63%
フランス語 (フランス)	1	64%
イタリア語 (イタリア)	1	80%
ポルトガル語 (ポルトガル)	1	80%
スペイン語 (スペイン)	1	87%
ギリシャ語 (ギリシャ)	1	90%

青色は一人称名詞が特に多い国。赤色は一人称名詞が1つではないもの。緑色は一人称名詞が1個のものとした。また上からキリスト教徒の割合が少ないほうから多いほうに並べた。やはり一人称名詞が多い国ほどキリスト教徒の割合が少ないことが分かる。また一人称名詞が減っていくとともにキリスト教徒の割合が増えていくことに注目していただきたい。ただし日本語における一人称表現は多数存在するので「日本語の一人称代名詞」(三宅鴻 1977年 p115-119)を参考にした。

4. 考察

結果からリサーチクエスチョンの通り各国の一人称名詞の数とキリスト教徒の割合には負の相関があった。このことについて事実ともに考察を述べていく。まず一人称名詞が1つの国々(表1の緑色)は歴史的にキリスト教と密接につながってきた。そのためキリスト教徒の割合が人口の半分あるいは過半数を超えているという点は納得できる(ただし主にロシアはロシア正教、ギリシャはギリシャ正教)。ここでこれらの国はなぜ一人称名詞が1つなのかを考えてみる。ヨーロッパ圏の考え方としてキリスト教の考え方、つまり神と関係を結ぶ「個人」という概念を持っていた。神に対して人々は平等であるという考え方ゆえに人間間の上下はないとされ一人称を使い分ける必要がなかったと考える。つまり1つでよかったのだ。ただし欧米で最もキリスト教徒の割合が少なかったロシアに関しては、かつてのソビエト時代において共産主義と合致した考え方、「無神論社会の中の宗教史博物館—ソビエト・ロシアにおける宗教研究についての一考察—」(高橋 沙奈美 2014年 20巻 p. 48)の言葉を取りとらして「科学的無神論」が流行したり、宗教が否定、弾圧されたりということがあったためその名残がいまにも残っていると考えられるため、過半数を切っていないとされていると考えられる。

しかし日本ではそうはいかない。そこには「講演なぜ日本にキリスト教は広まらないのか」(古屋安雄 2014年 53巻 p. 168)において「天皇が神主になったのが、皇室神道である。したがって、宣教的にはキリスト教と皇室神道という宗教との戦いなのである。」と述べられているように天皇の存在と日本人の宗教観があるからだと考えられる。日本にとって天皇とはアマテラスオオミカミの子孫、つまり「神の子孫」なのである。日本は列強諸国に劣らないような国民国家の形成のために天皇を信仰対象とする国家神道を強く勧めた。そのため、のちに入ってきたキリスト教はもはや信仰対象にはならなかったのである。そしてもう一つ大きな理由として日本における神道は、あらゆる現象や物に神が宿るという考え方であるということである。また亡くなった人までもが「仏」という神として祀られるのだから状況に応じて自分の立場が変わり主語が変化するのも納得がいく。以上のことから日本におけるキリスト教徒の割合が少ないの一人称名詞の数が多いことには関係性があることが分かる。

次にベトナムである。ベトナムはかつてフランスの植民地であったこともあるため、もともとは仏教の国だったがキリスト教も布教され今に至っていることが分かる。「解放」後のベトナムにおける宗教政策—カオダイ教を通して—(北澤直宏 2013年 50巻 2号 p297)にもあるようにキリスト教(カトリック)はベトナムの公認宗教にもなっている。またベトナムはたくさん少数民族が集まってできた多民族国家でもあるので、それぞれに進行するものがあり、それらが組み合わさって様々な神を信仰する多神教でもある。こういった点では日本と似ているものがあるように思われる。また多民族国家ゆえに様々な民族の一人称の表現方法が存在し、今に至るため一人称名詞が多数存在する理由となる。

最後に赤色部分に関してはどうか。韓国に関してはアジア圏にしてはかなりキリスト教徒の割合が多い。これにはやはり韓国における民族意識が寄与していると思う。それは「恨」という考え方である。「恨」とは「韓国の恨言説の日本における受容と展開: 80年代から2010年代までの韓国文化論」(古田富建 2020年 p27)にあるように「自分に対する「悔し」から生まれたものであり、それを解くことが美意識とつながるもの」という認識であり、この考え方がキリスト教と合致したのだ。なので今日までここまで普及したと考えられる。また中国に関しては文化大革命時にキリスト教が弾圧されたにもかかわらず、なぜ10%にまで登りつめたのか。これは近年の中国の経済成長によるものだとと思われる。急激な経済成長によって貧富の格差が拡大し、価値観が変わりつつある今、「中国キリスト教の研究状況と課題」(桜美林論考・法・政治・社会)(中生勝美 2020年 11月 p36)において「中国農村部では、キリスト教に入信する動機が、病氣治療や癒しをもとめると、とくに自分だけでなく家族の病への対処としている」とあるように病や心の拠り所を求めて進行する人が増えているのではないかと考えられる。またキリスト教国である欧米への中国人留学生の増加に伴うことも起因していると考えられる。以上からそれぞれ理由があってこのデータの結果になったことが分かり、相関があることが分かった。

5. おわりに

今回、なぜこのようなテーマを思いついた理由を述べたいと思う。自分は受験科目として世界史を履修していたのだが、日本ほどキリスト教の宣教師が着たにもかかわらず、広まらなかった国はなかったからだ。そして今回、言語学の授業を受けてみて日本だけ異常に一人称名詞が多いことに関係あるのではないかと思ったのがきっかけである。

改めて今回の問題を確認すると、「各国の言語における一人称名詞の数とその国のキリスト教徒の人口に対する割合には負の相関がある」であり、方法としては外務省や各国のサイトから人口に対する宗教人口を調べ、データとしてまとめた。また各国の言語の一人称名詞についてもまとめて表1を作成した。そして各々の国の歴史的背景や宗教観、民族意識などからなぜこの数値になったのかを考察することにより、相関があることを確かめた。結論としては Research Questionの通り両者の間には相関がみられた。

文献:

三宅鴻. 日本語の一人称代名詞. 1977. pp.113-120

https://doi.org/10.20594/religionandsociety.20.0_47

<https://doi.org/10.5873/nihonnoshingaku.53.167>

https://doi.org/10.20495/tak.50.2_273

古田富建. 韓国の恨言説の日本における受容と展開: 80年代から2010年代までの韓国文化論. 比較文化, 2020. pp.23-41

中生勝美. ナカオカミ. 中国キリスト教の研究状況と課題. 桜美林論考・法・政治・社会, 2020, 11: pp.31-49.